

福寿草は春一番に黄金色の可憐な花を咲かせ、長く寒い冬が終わったことを実感させてくれます。事実、福寿草が咲くと、それ以降に



福寿草になった女神

佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

雪が降ることはなく、小魚の雑魚(ざこ、ざっこ)類が、特定の河川へ産卵の為に遡上するので、人々は新鮮な小魚にありつけるうえ、雪解けの進む川辺には山菜が最も早く成長するので、おいしい山菜を食べられる時期の到来をも告げてくれます。

周囲が一面の銀世界の中で黄金色に輝く福寿草は、太陽のような明るさであることから、北海道の西方ではクナウ(kunaw-福寿草)といい、春の盛りを表わすタンポポもクナウ(kunaw-タンポポ)といいますが、雪解けの遅い北海道東部ではチライアパッポ(ciray-イトウ(の遡上する頃に咲く)apappo-花)といっています。チライは、幻の魚とされるイトウのことであり、アパッポとは花をさす言葉です。これは、福寿草が咲く頃に、海洋を回遊していたイトウが産卵のために河川を遡上してくる時期と重なっている為です。また同じ頃に飛来するオシドリも、チライマチリ(ciray-イトウがma-泳ぎ(始める頃に飛来する)cir-鳥)という名前がついています。

アイヌの人々は、冬が去りやらず、本格的な雪解けもまだだというのに、福寿草が寒さにめげず開花するには何か訳があると考え、じっくり観察した結果、次のような物語が誕生しました。

福寿草はその昔、人の為に下天を掌握する神様の一人娘でした。神々が住まう天上界と人間が住む地上界との間は多重層に分れていて、それぞれの層を見守る神様がいますと考えられていたのです。下天もその一つで、虹がかかる高さの位置だといわれています。

下天の神の一人娘はおてんばな娘であったので、神々が感情を害するのではとか、人間にも被害が及ぶ

のではないかということを恐れた両親は、成長して大人らしくなるまでは外出を禁止し、いつも見張っていました。

そうして数年が過ぎ、両親からの教えもあって娘は落ち着きを見せるようになり、親神たちも少しずつ気を抜くようになりました。しかし、駄目といわれると、ますます眼下に広がる地上界に降りたくなるのが人情です。

ある快晴の日、窓辺から下界を見ていた女神は、どうしても行ってみたい衝動にかられ、ついに下界の高い山の頂きに降り立ちました。女神は大自然の美しさに歓喜し、思わず山上で踊り始めました。

そうするとどうでしょう。軽い踏み足は地震を起こし、踊る体の動きに伴って揺れる袖や裾からの空気震動は大風となって山を下り、麓の村々に大変な被害をもたらしました。そこで両親は娘が二度と人前に出られないよう、地球の地下深く封じ込めてしまったのです。

女神は思わぬ失敗に深く反省しましたが、後悔先に立たずです。娘が被害を受けた人間に対して申し訳なく思う気持ちをいただいたことを知った両親は、人々を励ますのならと、一年に一度だけ地中から顔を出すことを許しました。そういうわけで、女神は福寿草となって、冬の終わりと春の喜びを人々に伝えパワーを与えるために咲くのだそうです。

この福寿草の女神の物語の類をオイナ(oyna-神々の物語)といい、このオイナには、「ハオ〜、ハオ〜、ハオ〜」という折節(リフレイン)が文句の一句ごとに挿入されます。この折節は、「助けて〜、助けて〜、助けて〜」という意味なのです。このような物語を思いながら、たった一度の失敗を今も悔やみ続けて助けを求めているといわれる福寿草(女神)を眺めると、花が愛らしいだけに、悲哀を誘います。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのどはん』(監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20〜令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1〜13』(北海道教育委員会、2008〜2022年)等。